

Next is us

日体魂を受け継ぐ者

2020年に向けて、
日体大から世界のすべての人々へ
スポーツの魅力と平和への願いをつないでいく。

03

*Special Contents***教育・カリキュラムの質の向上を
追求し続ける人材を育成**

教育学研究科 実践教科教育学専攻 開設



07

Next is us 日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

第1回 一つひとつの積み重ねの結果がオリンピックにつながる。

君嶋 愛梨沙 選手(ボブスレー・陸上競技)



09

活躍するOB・OGグローバルイシュー(地球規模の課題)に挑むH.I.S.で、
海外拠点の開設に奔走。自分のレールを突き進む。

戸田 祐樹 氏

株式会社 エイチ・アイ・エス 本社海外営業本部
ドーハ支店 Deputy Manager東京大会で金メダルを。選手・監督と気持ちをひとつに
応援して下さる皆さんに感動を伝えたい。

藤井 まり子 氏

公益財団法人 日本ソフトボール協会 事務局次長

2020年に向けて

▷3年後の夏、私たちはどのように過ごしているだろう。歴史に、心に刻み込まれる時間となることは間違いない。そして、その成功は一朝一夕に築かれるものではなく、今日、明日と一步一步の積み重ねによるものである。

▷本誌では、今号の君嶋愛梨沙選手から始まり、メダルに挑むアスリートのメッセージをつないでいく。その熱い思いに触れることによって、スポーツによる世界平和実現のために私たちが貢献できることを考えていきたい。

▷活躍するOB・OGインタビューでは、旅行業界、日本代表のチームマネジメントの立場からメッセージをいただいた。アスリート以外にも、私たちが力を発揮できるフィールドが広いことをあらためて感じる。訪日旅行者数が飛躍的に増大し、日本への関心がいっそう高まっている。今こそ、それぞれの夢に向かって努力を続け、誇りをもって諸外国の人々を迎えたい。

13

NASSの挑戦

すべての基本となる食への関心を高める。

栄養サポート

15

スポーツや学問の奥深い世界へ誘う多様なキャリア

平成29年度 新採用教員紹介

19

アスレティックデパートメント始動!

日本体育大学 功労スポーツマスター表彰

学報NITTAIDAI(ニッタイダイ)49号

発行日●2017年7月21日

発行●日本体育大学広報委員会

TEL 03-5706-0948

FAX 03-5706-0922

http://www.nittai.ac.jp/

制作協力●(株)図書出版



日体大とオリンピック

～ 黎明期と戦前までの展開 ～

学校法人日本体育大学および日本体育大学の歴史は近代オリンピック史とともにある。明治24(1891)年に「体育会」が、明治26(1893)年に「日本体育会体操練習所」が創立。ほぼ時期を同じくして、国際オリンピック委員会(IOC)が結成され(1894年)、96年には第1回の競技大会(アテネ)が開催された。すでにこのころから、両組織の接触が始まっていたという。

「日本体育会」(「体育会」を改称)が、明治33(1900)年にパリで開催された第2回国際体育会議(今にいうIOC総会にあたると思われる)への出席を山根正次氏(警視庁第三部長・医師、日本体育会監事)へ依頼。このことから、本学の前身が、日本を代表する体育団体として国際的に認知されていたことが窺える。その結果として、明治38(1905)年11月に日本のオリンピック参加のための委員会を設けるように促した書簡がコンスタンチノス・ギリシャ皇太子から山根正次氏に届けられた。ここでいうオリンピックとは、明治39(1906)年にオリンピック競技大会10周年を記念して催されることになるいわゆる“中間オリンピック”を指す。

さらに社団法人日本体育会と改称し、本法人の会員(後に顧問)に名を連ねる嘉納治五郎氏が明治42(1909)年にIOC委員に任じられる。このとき、出場選手を選出して派遣する組織となるよう依頼を受けたが、残念ながら実現しなかった。それは、“ひと握りの競技者のためではなく、国民全体の体位・体力の向上を図ること”を使命としていたことも理由であっただろう。

その後、昭和期に入り、ようやくオリンピック選手を輩出するようになった。中でも、第9回アムステルダム大会(1928年)の棒高跳びで6位入賞を果たした中澤米太郎氏の活躍は特筆すべきだろう。さらに昭和15(1940)年の東京大会に向けて機運が高まるが、戦争のため返上を余儀なくされる。決して平坦な道のりではなかったが、その後、日本勢の中核を担っていく。



第9回アムステルダム・オリンピック大会開会式の日本選手団旗手・中澤米太郎選手(『国民体育』昭和3(1928)年10月号)



第10回ロサンゼルス・オリンピックに本学から選手2名が参加見送り風景(日本体育大学125周年記念誌)

2017年4月開設

教育学研究科 実践教科教育学専攻 博士前期課程・博士後期課程 開設

教育・カリキュラムの質の向上を 追求し続ける人材を育成

体育・スポーツの研究と実践において牽引役を担ってきた本学。国際化、専門化がさらに進み、大学院研究科における高度な研究・人材育成に期待が集まっている。児童スポーツ教育学部が完成年度を迎え、本学のフィールドはますます広がる中、社会的要請に応え、「教育学研究科・実践教科教育学専攻」が2017年4月開設された。未来を担う子どもを育成するため、理論と実践を往還しながら、質の高いカリキュラムを追求できる人材を輩出する。

角屋 重樹
教育学研究科長

教育学研究科 実践教科教育学専攻の構想

実践教科教育学専攻は、教科教育に関する高度の学術研究により、その深奥をきわめ、学術の応用に貢献して実践的な教育力及び学び続ける教師に関する研究を推進するとともに、絶えることなく授業改善を行う教師の養成を目標とし、教科の共通性を基底に各教科の固有性を保持する新しい教科教育学の構築と人類の友好・親善に貢献することを目的とする。

○小学校教員養成を基盤として

教科の共通性を基底に、各教科の本質である固有性をとらえ、新しい見地から学習指導を構想し展開できる人材(カリキュラムプラクティスト)を育成。

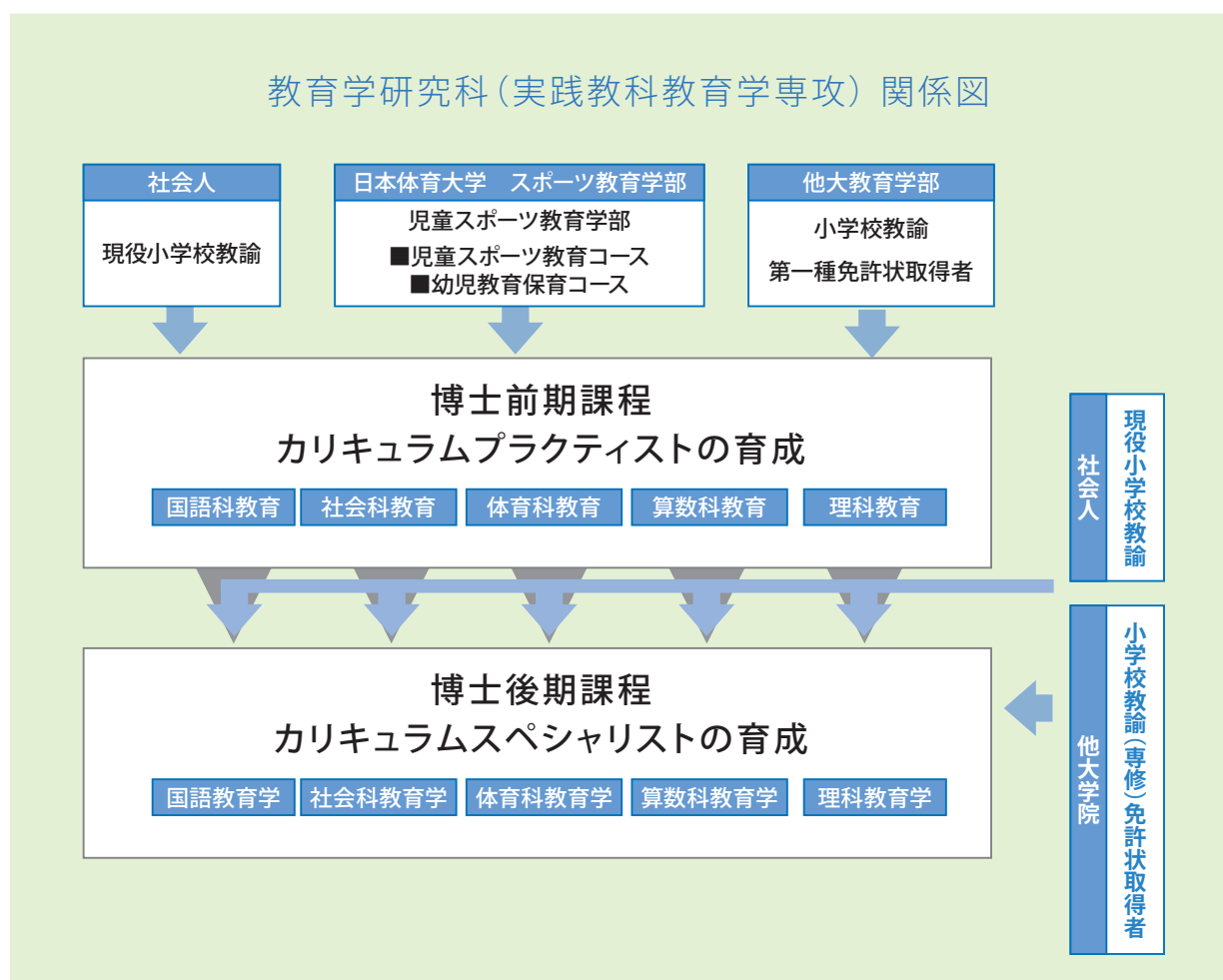
○実践力を備えた学び続ける教師

授業実践を行い、その実践を教科の本質や教材の本質という見地から課題を見出し、その課題を追究し絶えず授業改善を行うという自立的実践研究を有する人材(カリキュラムプラクティスト)の養成。

○世界的視野でカリキュラムを考える

各教科においてカリキュラムに関する理論と学習指導とを往還させ、新しい研究領域を見出す人材(カリキュラムスペシャリスト)を育成。

教育学研究科(実践教科教育学専攻) 関係図

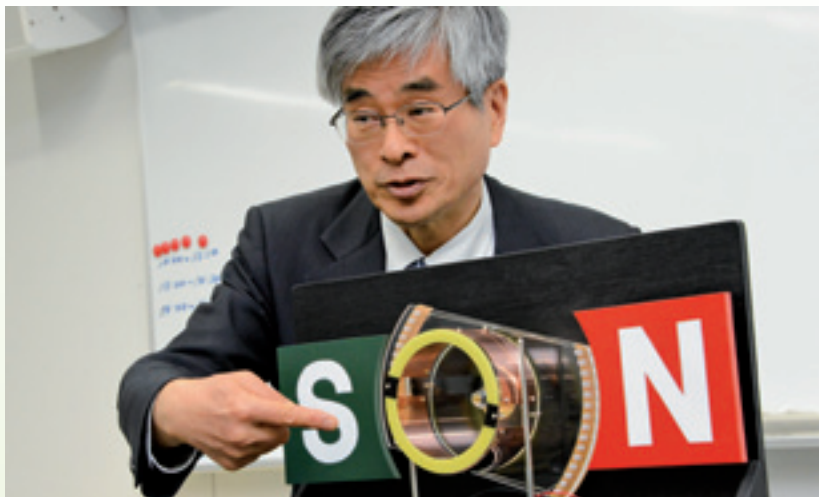


学部生、大学院生、社会人(現職小学校教諭)など、多彩な人材が集う刺激的な環境

求める人物像

博士前期課程：教育現場、とりわけ小学校における教科(国語、社会、算数、理科、体育)の学習指導について、その専門性を備え、あわせて実践的な研究に意欲をもって臨める人材を受け入れる。また、本研究科(博士前期課程)において、実践的指導力を更に高め、社会の急速な進展の中、教員としての探求力を有し、知識や技能の刷新のため常に「学び続ける教師」や理論的裏付けに基づく「実践的な教育力」を備えた資質の高い指導者を目指す者を求める。

博士後期課程：教育現場、とりわけ小学校における教科(国語、社会、算数、理科、体育)の学習指導について、その高い専門性を備えた人材を受け入れる。また、本研究科(博士後期課程)において、世界的視野で各教科の教育課程をもとにした指導について実践的検証力を高めるとともに、各教科の理論と学習指導において新たな研究領域を見出そうとする意欲を有し、「実践的な教育力」及び「論理構成能力」をもつ資質・能力の高い指導者を求める。



目標に向け改善行動を継続する。 本学の強みを発揮し創造的な教員を育てる。

強化し、その教育を充実させようという動きがあります。社会環境が複雑・多様化する中で、教育においても高度な知識や知見がいつそう必要とされている背景もあります。そのため、全国に教職大学院が開設されています。

そこで本学も日体大の強みを生かした大学院を設置すべきだという考えのもと、今年4月に博士前期課程と博士後期課程を同時に開設しました。大きな目的は現状の授業のやり方に満足せず、絶えず授業の改革・改善を行い、質の高い教育ができる小学校教員を育成することです。

具体的に言うと、各教科の本質や固有性を十分理解した上で、新しい見地から学習の方法を構想し実践できるカリキュラムプラクティストと、実際に授業を行い、その教科や教材の本質を見極めた上で課題を見つけ出し、それを追究・改善し研究を続けて新たなカリキュラムを提案できるカリキュラムスペシャリストの育成を目指します。

——それでは教育学研究科のカリキュラムの特徴についてお聞かせください。

現状、多くの教員養成大学は実践の教育者を養成することに主眼を置いています。そのためアカデミックな部分がお

ろそかになってしまっています。そこで実践をアカデミックに捉え、誰もが授業ができるような理論や手法を確立するカリキュラムを編成します。

例えば教科教育論では国語であれ、算数であれ、理科であれ、教科は異なっても、その指導内容を処理し、表現することは同じで、枠組みは変わりません。それを共に考えていくものです。

——その中で、特に日体大としての強みは何であるとお考えでしょうか。

日体大は体育という教科を基盤とした大学です。体育は自分で目標を決めて自分で改善していく教科です。その体育を通して育成される能力は、さまざまな部分へ転移できると考えています。

また体育系の学生はいい意味で挫折することに慣れていると思われれます。勝負に負けることはよくあることです。その挫折を糧にして次へ目標を定め、自分を更新していきます。そういう精神が基盤にあることが日体大の大きな強みだと思います。教育学研究科でもその精神は忘れず授業を行います。

——小学校教育の現場では、いまどのような課題があるのでしょうか。

日本の先生は基本的にとても優秀な人



教育学 研究科

(プロフィール)

角屋 重樹(かどや しげき)教育学研究科長
児童スポーツ教育学部教授。広島大学大学院
教育学研究科博士課程教科教育学(理科教育)
専攻単位取得後退学。博士(教育学)(広島大
学)。日本教科教育学会、日本理科教育学会、
日本科学教育学会所属。

——教育学研究科開設の背景や目的をお聞かせください。

国の方針として博士前期・後期課程を

実践にとどまらず、蓄積された手法を体系化・理論化し、広く普及に努めることが研究の使命である。そのプロセスで欠かすことのできないのが本学の強みであるジェネリックスキル(汎用的能力・態度・志向)だろう。高い目標や理想を掲げ、よい授業、カリキュラムを研究・追究し続ける人材を育成したいと角屋重樹教育学研究科長は語る。



が多いと思います。ただ自分が教えたいことが多いのか、教えたいという気持ちが強すぎるのか、子どもとともに授業を創ることができないようです。かつては子どもの気持ちを高めてくれる人間性がある先生が多かったです。教育学研究科ではそういう先生のノウハウを引き出し共有しようという狙いもあります。

また、もう一つの課題として児童・生徒の意識や行動がまちまちで学級経営ができないということもあります。つまり、クラスを一つにまとめられないのです。その点では体育の教員はチームをまとめる能力に長けていますので、日体大の優位点でもあります。

——現場や社会との連携について、構想などございましたらお聞かせください。

本研究科に入学してくる学生は、実は多くが社会人です。現状では博士前期課程が12人中、4人が社会人、後期は9人中、9人が社会人で、つまり、学生の多くが現役の小学校教諭です。そのことだけでも社会と連携していると言えるでしょう。ここで学んで、それぞれの学校で学んだことを現場で広げてくれるのです。それがそのまま社会と連携しているのです。日体大の資産を学校を通して社会に伝えることでも社会に貢献していると考えています。

——どのような人材を育成していきたいとお考えでしょうか。

先にもお話ししましたが、大きく二つあります。カリキュラムプラクティストとカ

リキュラムスペシャリストです。いずれにしてもカリキュラムをはじめとした教育に関するあらゆることの課題を見つけ、改善、そして新たな提案ができる人材を育成したいと考えています。

——では最後に日体大生や入学を希望する現職教員等に向けてメッセージをお願いします。

教育学研究科は現状では社会人の学生が多くを占めています。その情熱に負けないように、日体大の学生もぜひ教育学研究科の門を叩いてください。また現役の先生は世界でナンバー1であり、とても優秀だと確信しています。その優秀さを自覚してほしいです。そして教育学研究科でさらによりよい教育とともに追究しましょう。

これは学生全体に言えることですが、日本体育大学の伝統に埋もれてしまっている感じがします。確かに本学は126年の伝統があります。ただその伝統を受け継いでいるのは本学の現役学生です。自分たちが伝統を背負っているという意識を持つてほしいと思います。オリンピック選手がいるということで満足せず、自分は何ができるか、自分は社会にどう貢献できるかを考えることが大事でしょう。本学には具志堅幸司学長をはじめとしたメダリストも多くいます。そういう方々の生き方も学んでほしいです。とてもいいお手本になるはずです。

■教育学研究科を知るキーワード

①カリキュラムプラクティスト

現在の学習指導要領の目的と課題を十分理解した上で、各教科に共通する本質と固有性をとらえ、新たな学習方法を構想し、授業で展開できる専門家。博士前期課程では、カリキュラムプラクティストの養成を目指します。

②カリキュラムスペシャリスト

高度な実践の授業を行いながら、各教科や教材の本質を理解し、その課題を解決し新たなカリキュラムを構想し、提案できる能力を持つスペシャリスト。博士後期課程では、カリキュラムスペシャリストの養成を目指します。

③昼夜開講制

学部卒業生だけでなく、現役の小学校教諭の受講を広く受け入れます。そのため夜間(6～7時限)、さらには土・日曜または夏季・冬季休業期間に集中して講義、研究指導が受けられるように配慮しています。

④専修免許状

教育学研究科を修了すると国語でも算数でも本質が何かを考えるスキルがつくことが期待されます。専修免許状があることで、カリキュラムを受ける側から、発信して作成する側になるわけです。

オリンピックをめざす本学アスリートがリレー形式でメッセージを発信する
新企画。1回目はボブスレーと陸上で活躍する君嶋愛梨沙選手。

気負うことなく持てる力でベストを尽くす。

あくまで謙虚だが、目指すは冬(平昌)、夏(東京)連続出場と夢は大きい。

Next is us

日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

01

君嶋 愛梨沙

ボブスレー・陸上競技

なぜボブスレーか

私は本来は陸上競技部に所属しています。その陸上競技部部长・水野増彦先生に、勧められて、ボブスレーを始めたのです。オリンピックの可能性もあり、はじめはトライアウトだけ受けて水野先生への義理を果すつもりでした。

初めて氷の上でソリに乗った時、その重さとスピードに戸惑いました。長野市ボブスレー・リージュパークでトレーニングをしていましたが、本物の氷のコースは初めて。ボブスレーは前にパイロット、後ろにブレーカーという二人体制で、私は後ろに乗るブレーカー。ソリに乗るタイミングが難しかったことを覚えています。水野先生が見抜いてくださったように私に素質があったのか、トライアウトだけのつもりが、選手に選ばれてトレーニングをしてドイツに行くことになりました。ただ、陸上も続けたいという思いもあり、絶対に両立すると心に決めました。

ボブスレーの魅力

ボブスレーは、氷上のF1と言われています。その魅力はスピードとスリルです。最高速度は130キロを超えます。私はジェットコースターが好きだったので、「自分に向いている」と確信しました(笑)。

そうは言いながらも、やはり選手の立場としては恐怖を拭いきれません。ソリに乗っていると、ブレーカーの私は前が見えませんが、怖くないといえは嘘になります。また、もしブレーカーの私が乗り込みに失敗すると、失格となることはもちろん大怪我につながり非常に危険です。実は2〜3回引きずられたこともあるのです。

ボブスレーを始めたことで、陸上にも好影響が出てきました。昨年12月の大会後、日本に帰国して5月の陸上の競技会で中学3年生のときの自己ベストを6年半振りに更新できました。重いソリを一気に押していたので、スタートの



一つひとつの積み重ねの結果が オリンピックにつながる。

加速が飛躍的に向上しました。ボブスレーと陸上とを両立してきた甲斐があったと思います。

冬・夏の五輪連続出場を目指す

ボブスレーを始めたばかりの2016年12月にワールドカップ下部大会に出場して優勝。もちろん優勝を目指してベストを尽くしてきましたが、「私が優勝!」と正直驚いたことも確かです。そしてさらに予想以上の好展開に。再び代表に選ばれ今年2月に行われた世界選手権では7位になりました。これはなんと日本勢過去最高の順位だったのです。

ボブスレーの好結果を率直にうれしく思う一方で、陸上を続けていきたいという思いもありました。ボブスレーで平昌に、陸上で東京に出場する。その夢が実現すれば、夏と冬の両方のオリンピックに出場した5人目の選手になることができます。ただ気負うことなく、まずは目の前の大会を大切に考え、その大会で最高のパフォーマンスを出せるよう、ベストを尽くすことに主眼に置いています。一つひとつの積み重ねの結果がオリンピックにつながると信じています。

大学にいる時間が大好き

将来は陸上の指導者になりたいと考えて日体大を志望しました。スポーツをする最高の環境があり、よい指導者の方々もいます。それにまわりの仲間にも恵まれています。日体大にはオリンピックを目指す学生が多く、現にメダリストも多くいます。オリンピックが日常にあるのは、素晴らしいことだと思います。「オリンピックを目指す」と言うと、みんな本気で応援してくれますから。

さらに、ボブスレーにも出会い、陸上の記録も更新することができました。1、2年生まで

◆プロフィール

君嶋愛梨沙(きみしま・ありさ)

体育学部4年、陸上競技部所属。埼玉栄高等学校卒。陸上では関東学生陸上2017の女子100mで優勝。ボブスレーでは2016年12月ワールドカップ下部大会優勝、17年2月の世界選手権で7位(日本勢過去最高)。一人で映画を見に行くのがリフレッシュ法の一つとか。尊敬する人物は埼玉栄高校の先輩であり、同じ陸上短距離選手の高橋萌木子さん。ケガに悩まされた自分の境遇やスタイルと似ているとしている。

はケガもあって学校生活に悩んだこともありましたが、今は大学にいる時間が大好きです。大学院に進学しようかとも思っています。

——平昌、東京ですべてを出し切る

アスリートとしては、とにかく出場して全力を尽くすことが大事です。ただ、メダルを取ることだけを目標にするのではなく、それまでやってきたことを平昌と東京大会ですべて出し切る

ことを目標にしています。

私は高校の先輩でもある同じ陸上の高橋萌木子さんを尊敬していて、たくさん勇気をもらいました。今度は、私が頑張る姿を見ていただき、勇気づけられる人が一人でも多くできたらと思います。そういう人が増えていけば東京オリンピック・パラリンピックは必ず成功します。その日が来るのが今からとても楽しみです。

[Next is us 日体魂の聖火リレー]

次号に登場するアスリートに向けて、君嶋選手からエールと質問をいただきました。

◆君嶋選手からのエール

私はいろんな大会に出場する時、自分のためというより、誰かのために走る、戦う、そして勝つと考えています。自分のためではなく、誰かのためになると、何が何でも全力を尽くさなければならないと考えるからです。ともにベストを尽くしましょう。

君嶋選手から次号アスリートへ、リレー質問も展開していきます。ご期待ください。



活躍する

OB

株式会社 エイチ・アイ・エス
本社海外営業本部 ドーハ支店
Deputy Manager

戸田 祐樹 氏

INTERVIEW



グローバルイシュー(地球規模の課題)に挑むH.I.S.で、海外拠点の開設に奔走。自分のレールを突き進む。

H.I.S.の海外拠点は世界 No.1 の進出国数 66 カ国 141 都市 237 箇所。そして今夏、新たに開設される中東・カタールの

ドーハに赴任するのが戸田祐樹氏である。戸田氏が自ら企画し、リサーチを重ねて実現したプロジェクトだ。

学生時代、アメリカ・オハイオ大学への短期留学に参加したことがきっかけでスポーツアナウンサーを目指していたこともあるという。

周りとは異なる道を行く困難を厭わず、自分の信念に基づいて徹底的に進んでいく。

自分の道を自分で切り開いてきた戸田氏は、世界へ、そして未来に向けて挑戦を続けている。

あえてレールを外れた選択

高校の先生の勧めで日体大へ。なんとなく教職課程をとる。部活は柔道部。こうお話しすると、ごく普通の日体生のように思うでしょう。確かに高校生の頃は、国際関係の仕事に就きたいという漠然とした思いしかありませんでした。日体大での経験があったからこそ、私はひと皮もふた皮も剥けることができました。

一つは、柔道部入部数カ月後にマネージャーになったこと。監督と選手の間立って、試合や合宿などのイベントを無事終えた時の達成感は何物にも代えられません。誤解を恐れずに言えば、選手以上にいろいろな経験ができたと思います。

そして、2年生の夏休みにアメリカ・オハイオ大学への短期(1ヶ月)留学に参加。そこでさまざまな国や地域の人とスポーツをした思い出が強烈に残り、スポーツの感動や情報を多くの人に伝えたいと思い、帰国後スポーツアナウンサーを志すようになります。大きな声では言えませんが、この頃から教職の授業には出なくなりました。

結局、就職活動でマスコミへの願いが叶わず、青年海外協力隊(JICA)かH.I.S.かの選択の中で、旅行業界を選んだのです。H.I.S.は、地球規模の課題に取り組むための事業展開を進め、旅行業において世界進出国数No.1を誇る、66カ国141都市237拠点(2017年6月現在)を擁しています。世界が見れる場所かなと思いました。アメリカ赴任のチャンスもあるかもしれない。海外と関わる。素晴らしい経験や感動を個人や法人のお客様に伝える。やりたいと思っていたことがつながった気がしました。そして、3年半ほど国内で勤務し、いよいよ海外へ飛び出していくことになりました。

もし、周りに流されて学生生活を過ごしていたら今の私はないでしょう。気づきと挑戦の場を与えてくれた4年間に感謝です。

“maybe”がわからなかった私が海外に赴任する

最初の海外赴任先はミャンマーでした。実は、海外赴任の話をしていただいた時、最初は断っていたのです。でも、他社でシンガポールに赴任している高校の後輩が背中を押してくれ決断しました。実際に赴任しているという人のアドバイスですから心に

響きます。彼は、海外を経験したほうが絶対に成長できると熱く語ってくれました。

海外支店では、航空券やホテルの手配、営業で企業を回ったり、クレームに対応したり、さらにwebサイトの立ち上げから業務マニュアルの作成まで、現地スタッフの間に立って全部担当しました。ミャンマー人との業務中のコミュニケーションはほとんど英語でした。今ではコミュニケーションに問題はないですが、以前の英語力は決して胸を張れるものではありませんでした。

大学2年の夏にオハイオ大学に行った時、なんと私は“maybe”の意味さえわからなかったのです。そこから必死に勉強してきて、今に至るわけですから学生時代に英語が上手くないから海外勤務は無理ということはないでしょう。

電気、水などのインフラの苦労もありましたが、現地スタッフとの関係性づくりは非常に勉強させられました。正直、はじめのうちはミャンマー人スタッフをどこか信頼しきれていなかった反省があります。なんで遅いのだろう、あんなミスをするのだろうと。ある時、海外勤務の経験が豊富な上司に相談したところ「ローカルルールは理解できなくてもいいが、現地スタッフに対してはリスペクトすること」とアドバイスされました。振り返って起こったミスを書き出してみると、日本人でも起こりうるものばかりです。それからは打ち解け、現地スタッフからも歩み寄って話してくれるようになりました。

カタールの躍進を確信し 新拠点立ち上げを進言する

そして、今夏からカタールのドーハに赴任します。実は私の提案が採用されて、ドーハ進出が実現したのです。

今から4年前、ミャンマーからアメリカ・ニューヨークに行く機会がありました。その時、中東という響きに惹かれて、ドーハ経由のルートを選びました。空港の土産物屋で魔法のランプを売っていて、アラジンの世界はインドじゃなくてアラブなんだとあらためて知ったほどの認識から始まりました。

ドーハと言えば、1993年のサッカーワールドカップ・アジア地区最終予選の日本対イラク戦、「ドーハの悲劇」で記憶に残る場所です。その時の競技場のピッチがボロボロで、みすば

戸田 祐樹(とだ ゆうき)／体育学部武道学科、2009年卒。日本大学藤沢高校(神奈川)出身。戸田さんが活躍するH.I.S.は、世界平和に寄与することを目的とし、地球規模の課題(Global issues)に取り組むため、挑戦し続けている。従来の旅行業の枠組みを越え、ホテル・航空・テーマパーク、そして、AI・ロボット・エネルギーと多角的な事業を展開し、2023年には、宇宙運輸事業のサービスを開始する予定だと言う。入社後、法人営業部に3年半在籍し、ミャンマー勤務を経て、ドーハ開設準備中。法人営業と言っても単なる出張手配にとどまらず、業務やコストの効率化など、トータルにビジネスにおける課題解決を提案し、二人三脚で顧客企業の海外進出をサポートしている。



らしいイメージがありませんでした。そのドーハが見違えるように発展していたのです。離陸して飛行機の窓から街を見下ろした時、超高層ビル、コバルトブルーの海が目に入り、その素晴らしいさに思わず興奮しました。

これから覇権をつかむのはここだと確信しました。

その後、時間を見つけてはリサーチに向き、その過程で徐々にカタール人などにコネクションをつくっていくことが出来ました。最初の提案は見送られ、1年かけて企画を練り直しました。ドーハでは、2018年に世界体操、19年に世界陸上、22年にワールドカップ、23年に世界水泳、また20年に隣のドバイで万博があり、ドーハ支店の開設を実現しました。

信じたことはトコトンやりぬく

日体大では体育の専門科目のほか、経済学や科学史や英語などの科目にも興味がありました。これらも道を広げるきっかけになったような気がします。教職の授業を受けながらも、教員になろうかどうか迷っていた時期もあつて、違和感を覚えていたことも確かです。他の人がとっているから自分も教職を受けているという人もいて、正直、そういう考え方には疑問を持っていました。

レールを外れると言うか、みんなと違う道を歩むのはやはり勇気があることです。教職から方向変更した時は周りからいろいろ言われましたし、アナウンサーを目指すと言った時は冷たい目で見られたこともあります。また、カタールの企画はなかなか社内でも認めてもらえませんでした。でも、思いを胸に行動していれば必ずそれは叶うと、私は信じています。後輩の皆さんも、自分が信じたことは自信をもってやりぬいてほしいと思います。信念をもつて、人の何倍も努力して、徹底的にやる。それは柔道部の山本洋祐先生、小嶋新太先生の教えでもありました。柔道部では、「勝利への執念」「勝者としてのメンタリティー」を叩き込まれた感じがします。

弊社では、日体大の卒業生が入社後間もない時期からリーダーシップを発揮して活躍しています。スポーツを通じた世界平和への貢献はこれからますます重要なテーマです。競技とは少しアプローチは違いますが、旅行業界、とりわけ弊社ではその夢を実現できるフィールドがあります。

活躍する OG

公益財団法人
日本ソフトボール協会
事務局次長

藤井 まり子 氏

INTERVIEW



東京大会で金メダルを。選手・監督と気持ちをひとつに 応援してくださる皆さんに感動を伝えたい。

アスリートの活躍を支える人々がいる。ソフトボール日本代表のマネジメントを務めているのが藤井まり子さんだ。

1996年のアトランタオリンピックで野球・ソフトボールが正式種目に採用されて以来、喜びも悔しさも

選手や監督とともに分かち合ってきた。そして今、日本を代表する競技の一つになっている。

最高のコンディションで練習や試合に臨んでもらうために、表に出ない苦労は数知れないが、

地道な努力と日体大で培った人脈を活かし、スタッフを率いて精力的に活動している。

メダルを支える仕事

みなさんはスポーツを支える仕事というのを思い浮かべますか？ トレーナー、アナリストといった専門職。そして忘れてはならないのはマネージャーです。その陰の努力なくして、チームが成り立たないのは、日体生ならよくご存知でしょう。

私は現在、ソフトボールのナショナルチームの全体的なチームマネジメントを統括させていただいています。いわゆる総務の仕事がメインで、日本代表チームの合宿・遠征の準備、予算取り、強化に関する企画、広報など、業務は多岐にわたります。「SOFT JAPAN」のロゴの制定にも携わりました。

やりがいは、メダルに挑む選手たち・監督を支えること。国民の皆様は感動を提供するお手伝いができること。スポーツに携わる人々にとって、それは最大の喜びではないでしょうか。

おかげさまで2020年東京オリンピックにおいて「野球・ソフトボール」は追加種目に決定しました。ソフトボールは2008年の北京で金メダルを獲得していますので、力がいっそう入っています。合宿などを増やしている状況で、とても忙しい毎日です。

私は日体大卒業後、研究室に残り、研究員として授業補助をしたり、ソフトボール部女子のコーチとして後輩の指導に携わったりしていました。この時、今の日本ソフトボール協会の仕事もお手伝いしていました。その後、都内の私立中学・高校に教員、部活の顧問・監督として4年ほど勤務。結婚後、仕事から離れていた時、日本ソフトボール協会から再びお誘いをいただいたのです。ちょうど、1996年のアトランタ・オリンピックで、ソフトボールが初めて正式種目にされた時期でした。務まるかどうか不安な中、お引き受けして、とにかく無我夢中で取り組みました。マネジメントの仕事はこんなにやることがあるのかとあらためて実感することになります。アトランタ大会はメダルまであと一步の4位。まるで選手のような気持ちですごく悔しかったことを覚えています。なんとしても選手たちにメダルをとってもらいたい。そんな気持ちが強くなってきた時に、宇津木妙子日本代表監督(当時)からお声をかけていただき、この仕事を続けることを決意しました。次のシドニー大会は限りになく金に近い銀メダルと言われる成績。選手や監督の

努力はもちろんのこと、自分の総務の仕事という面でもよくここまでつてこれたなと感慨深いものがありました。

今の抱負はもちろん2020年東京大会で金メダルを獲得すること。選手と気持ち一つです。皆様に感動していただけるような試合ができるチームづくりをすること、そして広報として応援していただけるようなアピールをしていかなければいけないと思っています。

マネジメントの仕事を支える 日体大のつながり

ソフトボールは中学から。高校ではインターハイに3年連続出場し、日体大からお誘いを受けたのです。日体大のソフトボール部はものすごく強いという印象でしたので、お世話になりましたと即決しました。高校の体育の先生がほとんど日体大出身でしたので、迷いはまったくありませんでした。

ただ、こういう雰囲気か全然わかりませんでしたから、入学してからだいたい驚いたことは事実ですが(笑)。当時は、深沢東京・世田谷キャンパスと駒沢のグラウンドを、女子と男子で1日おきに交互に使っていました。駒沢で練習する時は、道具を全部運ばなければいけません。また「連絡まわり」という仕事がありました。メールやLINEもない時代、たとえば雨で練習場所が変更になると、先輩の下宿先を手分けして回って伝達するのです。そのため、先輩の住所をすべて覚える、テストまでありました。今でも仲間が集まると苦労した当時の話して盛り上がりがあります。授業では、ダンスや水泳が苦手で、単位を取るのにも苦労しました。

振り返ると、困難な状況にあつて、いろいろと工夫してみる、仲間と協力するといった経験は貴重だったと思います。先輩から代々受け継いできた伝統を引き継ぐ大切さ、先輩との関わり方、こうした縦のつながりに加えて、同期の横のつながり。日体大の絆がなかったら、今の協会の仕事はできなかったと言っても間違いありません。

藤井 まり子(ふじい まりこ)／体育学部体育学科、1983年卒。東京都立第五商業高校出身。日体大研究員、東京立正中学・高校教諭を経て1996年から現職。日本ソフトボール協会は男女ともに世界有数の競技力を誇るソフトボールにおいて、選手育成、代表選手の選考・派遣、諸大会運営、競技の普及・振興などの活動を展開している。事務局次長として活躍する藤井さんだが、現役時代は表舞台に立つピッチャーだったため、はじめは裏方への転身が仲間たちから意外に思われたとか。宇津木妙子さん、宇津木麗華さんをはじめソフトボール界を代表する指導者たちからの信頼も厚い。オリンピックに正式種目として採用されて以来、日本のソフトボールの躍進を陰で支えてきた。



日体大の環境やチャンスを 存分に活かしてほしい

マネジメントの仕事では多くの方々との関わり、人脈が非常に重要です。その意味でも、日体大出身で良かったと思うことが多々ありました。先生方、行政の方々など、全国どこに行っても日体大の先輩・後輩の方々が必ずいらついています。共通の話題ですぐに打ち解けて、惜しみなく力になってくださいます。このことは、競技や仕事を問わず必ず大きな武器になりますので、ぜひ大切にしてください。

今、日体大の近くに住んでいますので、キャンパスを時々訪れることがあります。建物が新しくなり、その変化には驚かされるばかりです。アスリートの皆さんにはぜひ「強い日体大」を盛り立ててほしいと思います。そして、学生の皆さんの志向も多様になってきているのではないかと思います。私が実感しているのは、競技や教員、事務職といういろいろな環境を経験できて非常に視野が広がったということです。中学生の合宿に同行しても教員の経験がありますので、比較的戸惑うことなく生徒に接することができます。教員を目指す皆さんも企業や海外などでの経験があると、生徒に伝えられることの幅が広がるのではないのでしょうか。日体大には可能性を広げるさまざまな環境があります。それを活かしてぜひ有意義な学生生活を過ごしてほしいと思います。

実は、私たちスタッフの仲間、日体大の卒業生が新たに加わっています。試合や合宿が滞りなく運営できてあたりまえ。失敗があれば大きな迷惑をかけてしまうというのがマネジメントの仕事です。しかし、スポーツで人を支えることにやりがいを感じる人には、この上ない魅力的な仕事だと思います。スポーツとはいろいろな関わり方ができます。東京オリンピック・パラリンピックに向けて、日体大からムーブメントを広げていきましょう。

私たちソフトボールも頑張ります！

「日体大アスリートサポートシステム(NASS)」は、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会において、「70名の学生及び卒業生をオリンピック・パラリンピアンとして輩出」という目標を達成するため、他に類を見ないこれまでの日体大の実績や知見を体系化し構築された。

「栄養サポート」は、アスリートを対象としたサポートであることは言うまでもないが、栄養の知識はすべての学生にとつて有用なものである。さらに、競技力向上のためという限定的な目的ではなく、生涯にわたり意識していく必要があるだろう。

2016年度は、11の運動部で、「栄養セミナー」「栄養アセスメント」「個別相談」などを延べ35回実施。その数は着実に増えているという。これらを通して、栄養における課題解決のため、一人ひとりに地道に食生活の改善を呼びかけていく。

競技前にもかかわらずコンビニエンスストアで購入した食事で済ませてしまう選手もいるという。また、食そのものに楽しみを見い出せないという声も聞く。こうした現実の前に、栄養に関する意識の啓発の推進役となっているのが「栄養サポート」だ。さらに、学生食堂のメニューの改善などに全学を挙げて取り組むとともに、保護者会からも援助をいただいている。学生諸君もぜひ食についてあらためて考えほしい。

NASSの挑戦 第5回

すべての基本となる食への関心を高める。 栄養 サポート

栄養アセスメント

選手あるいはチーム(クラブ)の栄養状態を把握するために、身体組成の測定、食習慣の調査、栄養素摂取量の調査など、種々の測定・調査を行う。



栄養セミナー

栄養に関する基礎知識をはじめ、競技特性をふまえた栄養管理、試合期の調整など期分けに応じた栄養管理、トレーニングの目標にあわせた栄養管理などを行う。



食生活、栄養に関する意識を高める 地道で息の長い取り組み

栄養サポートでは、競技力やトレーニングといった直接的なサポート以上に、選手や指導者、スタッフへ意識の変化を促す地道な取り組みが重要となる。卒業後や競技生活を終えてからも栄養管理を実践することが望ましい。もちろん競技に携わらない一般の学生にとっても栄養への意識を高めることは大切であり、栄養サポートは裾野の広い、息の長い取り組みと言える。

学友会クラブの依頼に基づき、「プログラム提供型」もしくは「プロジェクト構築型」のサポートを行っている点は他の医科学サポートと同様だ。「プログラム提供型」では部単位で実施する栄養セミナーが主になっているが、そこではさまざまな状況に合わせたきめ細かい対応が行なわれている。栄養に関する本質的なところは共通だが、どんな体力をつけたいのか、試合・練習のどちらに向けたものなのか、試合期、移行期、準備期などのどの時期なのか、また選手は寮生活なのか一人暮らしなのか、新入生か上級生なのかなど、部や競技種目、選手個人の状況によってサポート内容が変わってくる。そこでは選手や指導者への徹底したヒアリングが行われ、各部やNASSの他サポートとの連携も欠かせない。

食生活や栄養に不安を抱えながらも、なかなか改善に踏み出せない人もいるだろう。また、競技成績が向上してもそれが栄養サポートの効果と直接的に結びつけるのが難しいことも、栄養管理の意識が高まらない一因かもしれない。栄養サポートでは、食習慣や栄養素の摂取状況などをいねいにヒアリングしながら、栄養に関する課題を一緒に見つけ、栄養サポート計画を提案、実行に至るまでの支援を行う。栄養セミナーを通して「やってみよう」「取り入れてみよう」と、まずは興味を持ち、行動するきっかけとしてもらうことがスタートだ。

高い競技力にふさわしい 食に関する環境をめざしたい

NASSの展開を見てもわかるように、高度な専門性を備えた各領域が有機的に連携し合い、ありとあらゆる側面からサポートできるのが日体大の強みであろう。

さらに選手のサポートを志す学生が加わることによって人材育成の幅も広がる。栄養サポートにおいても、オリンピックや世界選手権等で活躍された指導者の知見を裏付けにすることによって、栄養の理論がより説得力をもって伝えることができるという。

一方で、世界レベルの競技力を支えるのにふさわしい食環境を整備することは、継続的に取り組んでいかなければいけない課題と言える。運動部の選手は忙しく、どのような食習慣で過ごしているのか、その実際は掴みづらい。学内はもちろん、海外遠征、さらに実社会に出てからも、いつでもどこでも適切な食事を自分で整えることができる自己管理能力が必要だ。そのためには、一方的なメニューを与えるだけではなく、食事を「自分で

考えて選べる」ような仕組みをつくっていくことが有効である。栄養学は一生涯使える知識であり、多岐にわたる競技に秀でた日体大で、自然と食に関する知識が身につく環境ができれば注目すべき先行例となるはずだ。

食習慣は一朝一夕で改善されるものではない。サポートを通して、もう少し早い時期から(若い年齢から)接点があったらもっと効果的な支援ができたかも知れないと感じることがあるという。その意味で、指導者を志す学生が授業やNASSでの学びや経験を活かし、教育現場や地域社会、家庭で食に関する啓発を推進してくれるようになるれば、社会貢献にもつながるだろう。食の指導は基本的に運動と結びつけて行われるのが理想であり、意識付けを継続して行うという点でも指導者のふだんの声かけが大切なのは言うまでもない。

食はすべての原点 多くの学生に関心を持ってほしい

アスリートにとつての食は、体重管理、身体組成、体力強化などの重要な意味をもつ。また、一

般の学生にとつても健康の維持・増進と、要するに生きるために欠くべからずものである。誰であれ、食事をいい加減にするのは好ましくない。食事に對する価値観・目的はどうであれ、理想的な食事を継続することで、得られることは多いはずである。

食事を見ると、その人の背景までうかがえるという。一人で食事をするのが多かったかなど、生活環境や家庭環境を垣間見ることができる。その中で、食事に期待や楽しみを見い出せない学生がいる。必要に迫られ量を無理して食べて、食事を苦痛に感じてしまう場合もあるだろう。そのような観点から、食事を楽しんで食べられるようなサポートも必要になってくるかもしれない。

いずれにせよ、食にいつそう関心を持ってもらいたいということが栄養サポートスタッフの期待である。おいしく楽しめる、リラクセスできる食環境で、ポジティブに競技や学校生活に励んでほしいと願っている。

NASSの最大の目標は「70名の学生及び卒業生をオリンピック・パラリンピアン」として輩出することであるが、本学が「スポーツ」「身体」「生命」と展開を広げる中で、NASSへの期待もさらに多面的になっていくだろう。栄養サポートも、東京オリンピック・パラリンピックへの取り組みにとどまらず、その後もいかに食に對する意識を継続していくかを注視している。食を自分の問題としてとらえて、多くの部に栄養サポートを活用してほしい。また、サポートを志す学生も門を叩いてチャンスを広げる契機としてほしい。栄養面にとどまらず、自己管理できる能力を高めることはこれからの社会で必須となるだろう。



（試合当時の朝ごはんのポイント）

試合当日の朝食も、栄養バランスが良い食事が基本です(主食、主菜、副菜、汁物、フルーツ、乳製品がそろった食事)。ただし、消化吸収の時間を考慮し、試合開始時間にあわせて「何を」「どれくらい」食べるかを調整します。競技種目にかかわらず、『高糖質食』でエネルギーの糖質をしっかりと確保しましょう。①主食やフルーツを多めにする、②サラダをパスタサラダにするなど糖質の摂取量を増やしましょう。



学生時代に 胸を張って誇れる 経験を

市川 優一郎

(いちかわ ゆういちろう)
体育学部 体育学科 准教授

研究テーマ:専門は心理学で、「こころ」と「からだ」の関連をテーマにしています。また、それらの研究から得られた知見がどのように教育や健康に応用できるかについても興味があります。
学生時代の思い出:大学時代は友人たちと自主的な心理学の勉強会を立ち上げ、週に1回の発表と討論を行っていました。また、大学以外では塾講師のアルバイトにも励んでいました。
日体生へひと言:大学生活はとても「自由」です。しかし、自由には「責任」が伴います。責任を持って自身の大学生活をデザインし、「学生時代にはこれに打ち込んだ」と胸を張って言えるものを見つけてください。
こんな人(趣味):料理をすること、写真を撮ること、インターネットなどが趣味です。

①神奈川県／②心理学、教育カウンセリング、スポーツ研究C／③日本大学文理学部心理学科卒、日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士前期課程修了、日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了、日本大学文理学部心理学科助教／④博士(心理学)(日本大学)



今を大切に 失敗を恐れず 果敢に挑戦を

小畑 直之

(こばたけ なおゆき)
体育学部 体育学科 助教

研究テーマ:ウエイトリフティングの競技力向上、コーチングに役立つような研究がしたいと思っています。修士論文では、スナッチの床反力について実験研究に取り組みました。
学生時代の思い出:日体大で様々なトレーニング方法を学び、卒業後はトレーニング指導者になって世界で活躍するアスリートを育てたいと思うようになりました。大学では、ウエイトリフティング部に所属していました。
日体生へひと言:「もっとしっかり勉強しておけば良かった」と思うのは大学を卒業してからです。今を大切にして、勉強と部活動に悔いのないよう励んでください。何事も失敗を恐れず成功するまで挑戦しましょう。
こんな人(趣味):スポーツはテニス、スキー。休日は釣りに行くか温泉に入ったりリラックスしています。

①石川県／②トレーニング実践演習、スポーツ研究C・D／③日本体育大学体育学部体育学科卒、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修了、東京栄養専門学校講師(運動生理学)、金沢学院大学職員、日本オリンピック委員会アシスタントナショナルコーチ／④修士(スポーツ健康科学)(順天堂大学)



生涯かけて 熱中できるものを 探してほしい

鹿野 晶子

(しかの あきこ)
体育学部 健康学科 准教授

研究テーマ:子どものからだと心、それを支える養護教諭が研究テーマです。日常的には、子どものからだに心に関する野外調査に従事しながら、子どもの元気を探究しています。
学生時代の思い出:クラブ活動、語学留学、バイトに卒業論文と、太く短くいろいろなことに熱中した4年間でした。やりたいことを一杯やれた、その満足感が次の力につながっている感じがしています。
日体生へひと言:自らの興味があることにはバワフルにかつ真剣に向きあう力を備えているのが日体大生だと感じています。日体大で生涯の興味を探してください。そのお手伝い、サポートができればと思っています。
こんな人(趣味):映画を鑑賞することは好きです。「告発」という映画、良かったら観てください。

①大阪府／②養護概説(養護教諭の職務を含む)、健康管理学／③聖心女子大学文学部教育学科卒、埼玉大学大学院教育学研究科学校教育専攻修了、日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程修了／④博士(体育科学)(日本体育大学)



多様性・異質性と 向き合える 寛容さを

清水 直治

(しみず なおじ)
体育学部 体育学科
招聘教授

研究テーマ:「障害のある乳幼児の早期からの発達相談と親のエンパワメント・家族支援」、「特別支援教育における行動支援のための行動分析の原理の応用」をテーマに理論的・臨床的研究を行っています。
学生時代の思い出:「70年安保闘争」の真っ只中。当時の学生たちは、社会と対峙して社会の矛盾を突き理想を求め、自己の実現を観念的に語る広義のインテリゲンチヤーを演じていたかもしれない。隔世の感があります。
日体生へひと言:自分で「問い」を立て、それに複数の観点から「答え」が準備できるようになってほしい。異質性・多様性に丁寧に向き合える寛容な精神を大切にしてほしい。そのためには、本をしっかり読みましょう。
こんな人(趣味):このところ、ボクシングと競馬のスポーツの「美」に感得しています。

①埼玉県／②発達障害児・者等教育総論、知的障害児・者の心理・生理・病理、知的障害児・者教育論／③埼玉大学教育学部卒、東京大学大学院教育学研究科修士課程修了、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学、東京学芸大学教育学部教授、東洋大学文学部教授／④教育学修士(東京大学)



出会いを大切に 自分の世界を 広げてほしい

周東 美材

(しゅうとう よしき)
体育学部 体育学科 准教授

研究テーマ:近代日本社会の音楽文化と「カワイイ」という価値意識との関係を探求しています。対象として扱っているのは童謡や宝塚、ナベプロやジャニーズ、70年代のアイドル等です。
学生時代の思い出:学問的な面では、学校の授業で学んだことはもちろん大きかったですが、自分が本当に学びたいことは授業だけでは足りず、専門書を独学で読み、学外の先生に教えるを乞うたこともありました。
日体生へひと言:多様な人々と出会って、さまざまな価値観に触れ、自分の世界を広げていってほしい。異質な他者と出会うことは、想像力を豊かにし、新しい考え方や生き方に気付く最良のきっかけを与えてくれます。
こんな人(趣味):ヨガや水泳。休日は猫と遊んだり、友人と過ごしたり、カフェで本を読んだりするのが好きです。

①群馬県／②社会学、変貌する社会と人間生活、教育の方法と技術(メディア教育を含む)／③早稲田大学第一文学部総合人文学科卒、東京大学大学院学際情報学府修士課程修了、東京大学大学院学際情報学府博士課程修了、東京大学大学院情報学環特任助教／④博士(社会情報学)(東京大学)



大きな夢を掲げ エネルギーに 挑戦してほしい

杉田 正明

(すぎた まさあき)
体育学部 体育学科 教授

研究テーマ:スポーツ科学的手法を用いて競技力を高めるための効果的なトレーニング法(高地・低酸素トレーニング)やコンディショニングに関する研究を行っています。五輪ではマラソン・競歩の科学サポート活動を行っています。
学生時代の思い出:陸上競技の中長距離走に没頭。指導者がいなかったため、書籍や雑誌から知識を吸収し、練習内容や調整法を試行錯誤。そのうち選手の科学的支援をしたいと思うようになり、現在の道に進みました。
日体生へひと言:大学4年間は、大きな夢を掲げ、それを実現させるための覚悟を決める猶予期間。日体大では、単に知識や教養だけを学ぶのではなく、感性を磨いて情熱、向上心、好奇心を持って夢にチャレンジして下さい。
こんな人(趣味):旅行。知らない場所の神社仏閣やお城、美術館、博物館などを見て回る。

①三重県／②パフォーマンス分析演習、コーチング科学特論IV／③三重大学教育学部卒、三重大学大学院教育学研究科修了、東京大学教養学部助手、三重大学教育学部准教授、三重大学教育学部教授／④博士(学術)(三重大学)



将来を見据え 納得できる時間を 過ごそう

関口 遵

(せきぐち じゅん)
体育学部 体育学科 助教

研究テーマ：スポーツコーチの学びとその支援について研究をしています。コーチが学びたくなる環境や社会づくりを目指しています。

学生時代の思い出：トレーニングコーチになるための勉強とオーストラリアンフットボールに取り組んでいました。大学の授業だけでは足りず、学内で勉強会を開催したり、学外での講習会に参加したりしていました。

日体生へひと言：一つのことを深く探求したり、人脈や経験の幅を広げたり、将来に向けて準備をしたり、様々な時間の過ごし方があると思います。将来を見据えながら、自分が納得できる時間を過ごしましょう。

こんな人(趣味)：新しいことを探している時間が幸せです。

①神奈川県／②コーチング演習／③日本体育大学体育学科卒、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了、日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程単位取得満期退学、日本体育大学総合スポーツ科学研究センター(スポーツアカデミー形成支援事業室)特別研究員／④修士(学術)(東京大学)



なんとなくでなく 自分にできる 100%で

田沼 広之

(たぬま ひろゆき)
体育学部 体育学科 准教授

研究テーマ：ラグビーフットボール競技における選手の心理的競技能力、トレーニング、ゲーム分析に関する研究、コーチングに関する研究など、指導現場で活用できる研究に取り組んでいます。

学生時代の思い出：ラグビー部に所属していました。学業と厳しい練習の毎日でしたが充実した毎日過ごせて、今でも良い思い出となっています。ラグビーを通じて多くの仲間ができ、人生の大きな財産となっています。

日体生へひと言：日体大での学生生活、1日1日を大切にしたい思い出をたくさん作ってください。なんとなくではなく、自分にできる100%で!教員として、そして先輩として全力で皆様をサポートさせていただきます。

こんな人(趣味)：色々な分野の人から話を聞くこと。

①神奈川県／②運動方法・ラグビー／③日本体育大学体育学部体育学科卒、日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了／④修士(体育科学)(日本体育大学)



人間性を 磨くことを 意識してほしい

中瀬 卓也

(なかせ たくや)
体育学部 体育学科 助教

研究テーマ：体操競技における動作分析の研究。指導法や新しい技術についての研究も行なっていき、日本の体操界の発展に貢献したいと考えています。

学生時代の思い出：体操競技の練習に明け暮れた学生生活。大学4年生の時のアテネオリンピックに出場することが目標でしたが、惜しくも1歩届かず、なかなか思うような結果が残せずに苦労したというのが感想です。

日体生へひと言：日体大の元気で礼儀正しく行動力がある学生たちは素晴らしいと思っています。人と人との関わり合いが人生であると思いますので、人間性を磨くことを忘れないでほしいと思います。

こんな人(趣味)：休日は基本的には家族と過ごします。趣味はゴルフです。

①滋賀県／②運動方法・器械運動・スポーツ実践指導法・器械運動／③日本体育大学体育学部体育学科卒、日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了、医療法人徳洲会東京本部・徳洲会体操クラブ、日本体育大学スポーツ専門職、体操競技部男子コーチ／④修士(体育科学)(日本体育大学)



自分探し 人間関係構築に とことん時間を

長沼 俊夫

(ながぬま としお)
体育学部 体育学科 教授

研究テーマ：特別支援教育における教育課程及び指導法に関する研究。特に、肢体不自由教育、重度・重複障害教育における各教科と自立活動の指導に関する実証的な研究をしてきました。

学生時代の思い出：同好会でサッカーを夢中になってやっていました。その時の仲間とは、卒業して30年以上経つ今も、集まってサッカーの試合をしては「反省会」と称して一杯飲みながら語らい青春を謳歌しています。

日体生へひと言：学生時代は、「自分探し」「仲間との深いつきあい」に、とことん時間をかけてください。また、教師をめざす人は、「教育の原点」と言われる「特別支援教育」に、ぜひ興味・関心をもってください。

こんな人(趣味)：50歳を過ぎてから大型バイク(harley-davidson)に乗る「リターン・ライダー」です。

①東京都／②特別支援教育総論、肢体不自由児・者教育論、重複障害児・者等教育総論／③早稲田大学教育学部教育心理学専攻卒、筑波大学大学院教育研究科修了、東京都公立養護学校教諭・主幹教諭(社会、自立活動)、国立特別支援教育総合研究所総括研究員／④修士(リハビリテーション)(筑波大学)



身体の不自由な 子どもたちに 夢と希望を

舟橋 厚

(ふなはし あつし)
体育学部 体育学科 教授

研究テーマ：発達障害児が楽しく生活するための工夫を動物介在療法やロボット介在療法中に自閉症児などに生じうる快感情を定量的に計測する方法により教育・療育現場に役立つ研究をしています。

学生時代の思い出：自閉症や知的障害のことを心理学だけではなく医学や脳科学を駆使して理解することが大切だと考え、その分野の研究者を志望。国際ロータリー財団奨学生として2年間アメリカに留学もしました。

日体生へひと言：親から授かった素直な身体と心に感謝しつつ、身体の不自由な子どもたちに夢と希望を与え、ともに生きることを大切にす若人として心身ともに大きく育ててくださることを期待しています。

こんな人(趣味)：犬が大好きです。ピアノ演奏(バッハ、ショパンなど)語学、子育ても好きです。

①愛知県／②病弱児・者の心理・生理・病理、病弱児・者教育論／③名古屋大学教育学部教育心理学専攻卒、名古屋大学大学院教育学研究科博士前・後期課程修了、医学博士課程中退、名古屋大学教養部助手(心理学)・講師・助教授(情報行動論)、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所教育福祉学部室長／④博士(医学)(名古屋大学)



今を土台に 新しいことに 挑戦してほしい

松本 真咲

(まつもと まさき)
体育学部 体育学科 助教

研究テーマ：舞踊に関する歴史、身体表現形態の比較検討、スポーツ現場における表現スポーツの在り方などをテーマに、研究をしています。

学生時代の思い出：ダンス部に所属し、授業と部活動の合間を縫って図書館や美術館、CDショップなどを巡りながら日々創作活動に動んでいました。学生時代の仲間達は、私にとって誇りであり大切な宝物です。

日体生へひと言：常に前を見据えて、長期的・短期的目標をたてて一步一步進んで下さい。日々の努力は実を結びます。そして「今」やっていることを土台として、どんどん新しいことにチャレンジして欲しいです。

こんな人(趣味)：面白そうな踊りや文化の情報を得たら、国内外問わず現地にいき土地の人と交流しています。

①茨城県／②運動方法・ダンス(フォークダンス含む)／③日本体育大学体育学部社会体育学科卒、日本体育大学体育専攻卒、日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了、神奈川大学非常勤講師(健康科学/生涯スポーツ)、桜美林大学非常勤講師(エアロビクス/リズムダンス)／④修士(体育科学)(日本体育大学)

スポーツや学問の奥深い世界へ誘う多様なキャリア



人のつながりを
広げるために
自分自身を
魅力的に

岡出 美穂

(おかで よしのり)

スポーツ文化学部
スポーツ国際学科 教授

研究テーマ：体育の授業のカリキュラムの開発、授業づくり論並びに体育教師教育のプログラム開発に関わってきました。

学生時代の思い出：大学入学時にドイツ語を履修し、3年生からドイツ語学校に通学。3年生で大学院進学を考え出しました。これが転機となり、大学院でドイツのスポーツ教育学の大家の研究に入ることになりました。

日体生へひと言：人との出会いが大きく人生を変えてくれます。継続するつながりは、自分を磨くことを求めます。自分を大切に、自分自身を魅力的に。それができる時間を皆さんは持っていますので十分に活用してください。

こんな人(趣味)：語学には興味があり、日常的に英語には接する機会を持つようにしています。

①三重県／②体育科教育法、教材・教具論、体育科教育実践論／③奈良教育大学教育学部小学校教員養成課程卒、筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻修了、愛知教育大学教育学部助教授、筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授、筑波大学体育系教授／④博士(教育学)(筑波大学)



アジアに、世界に
思い切って一歩を
踏み出してほしい

金田 英子

(かねだ えいこ)

スポーツ文化学部
スポーツ国際学科 教授

研究テーマ：スポーツを手立てとした国際保健学分野での研究。とりわけ、国際学校保健や健康教育に重点を置いた、途上国での感染症対策に興味を持っています。

学生時代の思い出：陸上競技部(長距離)に所属。大学院を休学し、青年海外協力隊の体育隊員として、ネパールに2年8カ月間いました。異文化に触れることによって、実に多くのことを現地の人から学びました。

日体生へひと言：「いいなあ～。どうしたら、英語が上手になるんだろう？」と嘆いている君！ 勉強しなければ、上手にならないのは当たりまえです。是非、学生時代にアジアに、そして世界に、一歩を踏み出してみて下さい。

こんな人(趣味)：海外で、その国の美味しいものを、現地の人と一緒に楽しむこと。

①愛知県／②健康スポーツ開発論、国際保健学、労働衛生／③日本体育大学体育学部健康学科卒、日本体育大学大学院体育学研究科修了、長崎大学教養部助手、長崎大学熱帯医学研究所助教、東洋大学法学部准教授／④博士(医学)(長崎大学)



自分の手で
チャンスを
つかんでほしい

小柳 将吾

(こやなぎ しょうご)

スポーツ文化学部
武道教育学科 助教

研究テーマ：一生涯を通して実施できる体操に対し、健康との繋がり、体操のあり方、体操の普及をテーマに研究しています。

学生時代の思い出：体操部に所属。競技を目的としない体操を通じて、体操は勿論のこと、社会的知見を広げ、世界へ目を向ける意識を学びました。余暇時間、アルバイトの時間よりも、勉強と部活動に時間を費やしました。

日体生へひと言：大学生生活の4年間とは、社会に出て何をすべきか、自分がどうあるべきかを探し求め答えを見つける貴重な時間です。どうぞ、夢実現のため、歯を食いしばり自分の手でチャンスを掴み取ってください。

こんな人(趣味)：中国伝統楽器「二胡」を弾くこと。

①神奈川県／②運動方法・体づくり運動(体操)、集団行動実技／③日本体育大学体育学部社会体育学科卒、日本体育大学大学院体育科学研究科修士課程修了、神奈川大学非常勤講師、横浜商科大学非常勤講師、Rhein Kindergarten(ライン幼稚園／ドイツ)体操主任／④修士(体育科学)(日本体育大学)



新たな自分を
見つけるのが
大学生生活の醍醐味

福井 元

(ふくい げん)

スポーツ文化学部
スポーツ国際学科 助教

研究テーマ：スポーツの用具・施設の変化により、ルール及び技術や戦術はどのように変化するかというテーマのもと、スポーツの技術史といわれる分野の研究に取り組んでいます。

学生時代の思い出：軟式野球部に所属し、勉強というよりはクラブ活動が中心の生活だったと思います。大学では素晴らしい友人や先輩後輩に恵まれ、卒業後20年近くになりますが、今でも付き合いが続いています。

日体生へひと言：大学生生活は、これまで経験してこなかったことが経験でき、これまで見えなかったものが見えるようになります。様々なことにチャレンジし、新たな自分を見つけるのも大学生生活の醍醐味だと思います。

こんな人(趣味)：休日は旅行や、釣り、キャンプなど自分がしたいことはあるのですが、子ども達の希望が優先。

①青森県／②スポーツ文化論、アジアのスポーツ文化論／③日本体育大学体育学部体育学科卒、日本体育大学大学院体育学研究科博士前期課程修了、日本体育大学助手、国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科助手、桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部専任講師／④修士(体育科学)(日本体育大学)



社会に出て
即戦力として
活躍できる人材に

古澤 伸晃

(ふるさわ のぶあき)

スポーツ文化学部
武道教育学科 助教

研究テーマ：剣道の国際普及に関する研究。文化的・精神的な要素の強い日本の剣道がどの様に受容され、捉えられてきたのか、指導者を中心に研究して、指導文化の変容過程を明らかにすることを目指しています。

学生時代の思い出：剣道部主将として日本一を目標に稽古に励んでいました。また、深沢寮の二年間早朝のエッサッサ訓練はとても印象に残っており、仲間とともに実演会で発表したことが大きな財産となっています。

日体生へひと言：「日体大出身者はすごいね」と言われるよう、社会に出て即戦力として働ける大人になってほしい。大学を卒業しても日体大で学んだ思いやりの心を大事にしながら目配り・気配りができる人になって下さい。

こんな人(趣味)：愛犬と散歩、悩んだ時は掃除、洗濯をしてリフレッシュしています。

①熊本県／②運動方法・武道(剣道)、武道実技(形)、専攻武道実技Ⅱ(剣道)／③日本体育大学体育学部武道学科卒、日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了、皇宮警察本部教養課皇宮警部補、世田谷学園非常勤講師、日本体育大学スポーツ局スポーツ専門職／④修士(体育科学)(日本体育大学)



社会を主体的に
リードできる
人材を目指そう

松浪 登久馬

(まつなみ とくま)

スポーツ文化学部
スポーツ国際学科 准教授

研究テーマ：「北米先住民族の球戯に関する研究」多種多様な彼らの球戯を中心に、その構造と機能に関して研究しています。

学生時代の思い出：学部での専攻は考古学でした。部活はアメリカンフットボール部に所属。どちらも覚えているのはきつかった事ばかりです。久しぶりに同期と会っても、きつかった思い出話ばかりになります。

日体生へひと言：「国があなたのために何をしてくれるかを問うのではなく、あなたが国のために何を成すことができるかを問うて欲しい」(ジョン・F・ケネディ)。主体的に社会をリードする人材を目指してください。

こんな人(趣味)：映画鑑賞と窯元巡り。スポーツ以外の人の文化的な行動に触れるのが良い刺激になります。

①アフガニスタン／②スポーツ人類学、スポーツ史／③国士舘大学大学院博士課程スポーツ・システム研究科、日本体育大学大学院博士前期課程体育科学研究科、青山学院大学文学部史学科、近畿大学准教授、日本体育大学助手／④修士(体育科学)(日本体育大学)



目標を見つけ 実現に向けて 奮闘してほしい

池野 範男

(いけの のりお)

児童スポーツ教育学部
児童スポーツ教育学科 教授

研究テーマ：社会科教育の原理研究、シティズンシップ教育の国際比較研究、教科教育学の基盤・研究方法論研究
学生時代の思い出：高校日本史教師を目指していましたが、大学2年で挫折し、教育学に方向転換。何をどのように教えるとどんなことがなし得るのか、内容と方法とともに目標の追究が重要と考え、大学院に進学しました。

日体生へひと言：自分の目標を見つけ、それを目指して、奮闘してほしい。そのためには、心と頭を使ってほしい。先生方はそれを手助けしてくれると思います。

こんな人(趣味)：60年代に青春を過ごしたので、そのころのジャズやプリティッシュ・ロックが今も好きです。

①滋賀県／②初等社会科教育法、社会科実践研究、教科教育研究法／③広島大学教育学部高等学校教員養成課程社会科(歴史)卒、広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻博士課程後期満期退学、広島大学教育学部助手、講師、助教授(准教授)、教授／④教育学修士(広島大学)



目的意識をもち 自分の軸を 見つけてほしい

稲田 結美

(いなだ ゆみ)

児童スポーツ教育学部
児童スポーツ教育学科 准教授

研究テーマ：理科教育を専門とし、学習者の特性に応じた理科指導のあり方について研究しています。特に、理科の苦手な学習者に着目し、学習を促進するための指導法を検討しています。

学生時代の思い出：クラブ活動や塾講師のアルバイト、旅行など、多くの経験を積みました。研究の面白さを知ってからは興味も拡散せず、「理科教育」を深く知りたいと思うようになり、研究が生活の中心となりました。

日体生へひと言：これから先の長い人生において、自分を支える軸となるものを大学で見つけられるといいですね。そのためには、ただ漫然と日々を過ごすのではなく、目的意識をもって行動していくことが大切です。

こんな人(趣味)：各地に出かけて、その土地の文化(特に美味しいもの)を知ることです。

①千葉県／②初等理科、初等理科教育法、理科教育実践論／③日本女子大学理学部物質生物科学科卒、筑波大学大学院修士課程教育研究科修了、東京都立中学校教諭(理科)、筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科単位取得退学、上越教育大学大学院学校教育研究科准教授／④博士(教育学)(筑波大学)



未来のために 自分に投資をして 力をつけよう

今關 豊一

(いまぜき とよかず)

児童スポーツ教育学部
児童スポーツ教育学科 教授

研究テーマ：体育科学習内容の可視化、体育科の内容構成の検討を現場の授業実践をもとに取り組んでいます。

学生時代の思い出：3年生までは授業と部活一辺倒でした。4年になる前の教職ガイダンスを受けて、部活の指導者ではあるけれど保健体育の授業をきちんとできる教員にならなければならないと自覚した覚えがあります。

日体生へひと言：人の能力はそれぞれ。自分の力をつけて、将来に発揮できるように、今のうちに自分に投資してください。未来を切り拓くのは、かなりの部分、自分自身だと思います。応援します。

こんな人(趣味)：なかなかできていないが、週末の気晴らしの運動、ゴルフ。

①千葉県／②初等体育C(子どもの運動遊び)、児童スポーツ指導論、教科教育研究法、教科目標論、カリキュラム開発講究(体育科教育学)／③筑波大学体育専門学群卒、千葉県立高等学校教諭(保健体育科)、筑波大学大学院修了、順天堂大学スポーツ健康科学部准教授、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部長／④博士(スポーツ健康科学)(順天堂大学)



入学時の目標を 超えるような 素敵な自分に

金子 嘉秀

(かねこ よしひで)

児童スポーツ教育学部
児童スポーツ教育学科 助教

研究テーマ：保育内容の歴史的な変遷について研究しています。また遊具での遊び方など、園内ルールが子ども同士の相互作用を経て形成されていく過程にも関心があります。

学生時代の思い出：「何でも自分で見てみる、やってみる」をモットーに、2年生時には途上国で教育ボランティアをしたり、3年生になって日本の学校教育にも興味が出てきてからは学校ボランティアなどをしたりして過ごしていました。

日体生へひと言：様々な経験や出会いを通して、「入学した頃にイメージした4年後の自分」を凌ぐような、素敵な皆さんになって卒業してほしいと思います。貴重な4年間の学生生活を謳歌してください。

こんな人(趣味)：月並みですが、ペットと戯れるのが最近の休日の一の過ごし方です。

①京都府／②保育内容(人間関係)、障がい児保育、保育実習指導I／③広島大学大学院教育学研究科博士課程後期修了、広島大学大学院教育学研究科特任助教、目白大学人間学部子ども学科専任講師／④博士(教育学)(広島大学)



バイタリティ溢れ 筋が1本通っている 日体生に期待

中島 龍一

(なかじま りゅういち)

児童スポーツ教育学部
児童スポーツ教育学科 准教授

研究テーマ：音楽教育と音楽表現に関する研究／音楽療育研究(障害のある子ども達に活動・参加意欲を芽生えさせるための音楽形態の構築と、ICFとの関連を持たせる研究)

学生時代の思い出：大変厳しい担当教官でしたので、ピアノ鍛錬(日体大風に言えば、トレーニングと試合)に明け暮れた学生時代でした。それでも、窮屈さは感じることなく、それなりに学生生活を楽しんでいました。

日体生へひと言：目標に向かって鍛錬し、困難を乗り越える力と活気のある姿勢を持ち、何処か1本筋が通っている日体生が好きです。アスリート精神を基に、様々な可能性に向かってどんどんチャレンジしてください!!

こんな人(趣味)：散歩(色々な建築物を見ること)、絵画鑑賞(Daliが好き!)、掃除

①神奈川県／②初等音楽、初等音楽科教育法、器楽演習／③武蔵野音楽大学大学院音楽研究科ピアノ専攻修了。ジャンルにこだわらない幅広い演奏活動を展開、作・編曲作品も発表、パレエピアニストとしても活動。兵庫大学短期大学部保育科専任講師、兵庫大学生涯福祉学部こども福祉学科准教授／④芸術学修士(武蔵野音楽大学)



大学4年間 全力で取り組み 将来の財産になる

若尾 良徳

(わかお よしのり)

児童スポーツ教育学部
児童スポーツ教育学科 准教授

研究テーマ：「保育者のライフコースにおける結婚と就業」「異性交際の発達に関する規範意識」が研究テーマです。
学生時代の思い出：友人と夜まで語り合ったり、近くの下宿の友人と一緒に銭湯に行ったりと、楽しい学生生活を送っていました。大学院では、意義のある研究、おもしろい研究とは何かを日々模索していました。

日体生へひと言：大学4年間の生活を、勉強も部活も遊びも、全力で取り組んでください。また、今までに経験したことのないことにチャレンジしてみてください。そこで得たことが、必ず将来の自分に繋がっていきます。

こんな人(趣味)：休日は子どもと海や山、公園などにでかけて、散歩や釣りなどを楽しんでいます。

①岐阜県／②保育者論、幼児理解、教育実習I・II(幼稚園)／③学習院大学人文科学研究科博士前期課程心理学専攻修了、東京都立大学人文科学研究科博士課程心理学専攻単位取得満期退学、浜松学院大学現代コミュニケーション学部准教授、こども教育宝仙大学こども教育学部准教授／④修士(心理学)(学習院大学)

アスレティックデパートメント始動!



平成29年4月1日、アーチェリー研究室の山本博教授を長としたアスレティックデパートメントが発足しました。アスレティックデパートメントは、これまでのスポーツ局やNASS(日体大アスリートサポートシステム)の組織と機能を統合し、新たにスポーツマネジメント部門やコーチ育成の機能を追加するなど、日体大のスポーツ推進の中核を担う組織です。スポーツ立国戦略の基本的な考え方である日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参加する機会を確保することなど、専門的に競技を行う人や地域でスポーツ指導を行う人など様々な人々でスポーツに関わる人々を応援していきます。

今後は各競技の観戦ツアーを企画したり、本学関係者の活躍をどんどん発信していく予定です。これからのアスレティックデパートメントの活動にご期待ください!



日本体育大学 功労スポーツマスター表彰

日本体育大学 功労スポーツマスター表彰が、平成29年4月3日の入学式に合わせて行なわれました。日本体育大学功労スポーツマスターは、本学の卒業生の中から、体育・スポーツの競技者または指導者として多年に亘り、顕著な成績を残した者、我が国の体育・スポーツ文化の深化・発展に対し、多年に亘る優れた貢献が認められる者に授与される称号です。



泉 勝壽先生



渡邊 靖弘先生

■バレーボール

吉川 渉 (きっかわ わたる) 1941年2月6日生、76歳。1963年3月 体育学科卒

功 労：崇徳高校(S38年4月～H13年3月)

春高バレー優勝4回、インターハイ優勝6回、国体優勝4回

昭和16年、広島県生まれ。大学卒業後、崇徳高等学校に赴任。バレーボール部を指導され、春高バレー優勝4回、インターハイ優勝6回、国体優勝4回を達成されました。

※吉川先生は、式典に欠席されております。

■剣道

泉 勝壽 (いずみ かつとし) 1942年9月5日生、75歳。1965年3月 体育学科卒

功 労：阿蘇高校(現阿蘇中央) (S48年4月～H15年3月)

インターハイ男子優勝2回・女子8回、玉龍旗女子5連覇を含む10回優勝

昭和17年、熊本県生まれ。大学卒業後、阿蘇高等学校(現阿蘇中央高等学校)に赴任。剣道部を指導され、インターハイ男子優勝2回・女子8回、玉龍旗女子5連覇を含む10回優勝を達成されました。

■ハンドボール

渡邊 靖弘 (わたなべ やすひろ) 1943年7月3日生、73歳。1966年3月 体育学科卒

功 労：横浜商工(現横浜創学館) (S41年4月～H18年3月)

全国選抜優勝5回、インターハイ優勝3回、国体優勝2回

昭和18年山梨県生まれ。大学卒業後、横浜商工高等学校(現横浜創学館高等学校)に赴任。ハンドボール部を指導され、全国選抜優勝5回、インターハイ優勝3回、国体優勝2回を達成されました。